

地域との連携による世界遺産学習の一環としての英語活動

土江和世

(奈良県川西町立川西小学校)

吉村雅仁

(奈良教育大学大学院 (教職開発専攻))

English Language Activities as Part of Community-based World Heritage Learning

Kazuyo TSUCHIE

(Kawanishi Municipal Kawanishi Elementary School)

Masahito YOSHIMURA

(Nara University of Education)

要旨：本研究は、小学校を取り巻く地域や小学校教員の特性を考慮しつつ、教科領域等の枠組みを超えたカリキュラム開発を行い、その中に外国語活動を位置づけた実践の報告である。具体的には、地域の伝統芸能である能に関する学びを目的として総合的な学習の時間と音楽との合科として元々学校が行っていた教育活動に英語活動を組み込んだ単元、地域教育委員会とともに児童の学びを公開する機会の提供、能の学習をさらに世界遺産教育という大きな枠組みへと発展させ児童にその学びを英語で発表させる単元という三つの教育活動からなるプロジェクト型外国語活動の紹介を行う。その成果としては、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成などの外国語活動に関わる目標への接近、文化間の相互交流や自分たちの持つ世界遺産の意義や重要性に対する実感など世界遺産教育上の目標の達成、外国語学習や世界遺産学習への学習意欲の高まりなどが見られた。

キーワード：世界遺産学習 World Heritage Learning 教育委員会 Local Board of Education
地域との連携 Collaboration with the Community

1. はじめに

今年度より全面実施となった小学校高学年必修としての外国語活動では、何が求められており、何ができるのであろうか。一見簡単に答えられそうな問いではあるが、実際には、人により、立場によりその答え方は異なってくるように思われる。本研究の前提としてこの二つの問題をまず整理したい。

第一の問題すなわち何が求められているかに関しては、学習指導要領に基づいて大枠は共有されるものの、その解釈はかならずしも簡単ではない。学習指導要領解説(文部科学省、2008)には、小学校外国語活動新設の経緯として、1986年の臨教審答申における英語教育開始時期の見直し、1996年中教審第一次答申及び1998年学習指導要領改訂による総合的な学習の時間における国際理解教育の一環としての導入、2002年の『英語が使える日本人』育成のための戦略構想』の議論から2008年学習指導要領改訂における外国語活動

必修化への流れが記述されている。この流れをごく単純に見ると、日本人の英語スキル向上のために英語教育の開始時期を早めたとも解釈できるが、経緯に国際理解教育が絡んでいる点及び外国語活動の目標及び内容に関わる次のような説明から必ずしもそうではないことがわかる。

外国語活動の目標は「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」とあり、体験、理解、態度、慣れ親しませ、素地などの言葉が並んでいる。さらに解説の中には「スキル向上のみを目標とした指導が行われたりすることは、本来の外国語活動の目標とは合致しない」とまで書かれている。

また、指導内容については、コミュニケーションに関わる事項と言語や文化の体験的理解に関わる事項の記述を見ると、体験、積極性(態度)、気付きが重視

され、特に後者は国際理解教育との関係が強く意識されたものになっていることがわかる¹。

第二の問題は、現在の小学校教育現場で具体的に何ができるのかという点である。将来仮に外国語が教科化され検定教科書も配布されれば基本的にそれに従うこととなるであろうが、教科でもなく教材も安定しない現時点では、学校教育現場とりわけ主に授業を担う学級担任の手に委ねられる部分が極めて大きいと言える。その学級担任の多くは外国語の教員免許を持たないだけでなく、外国語そのものも得意ではないという例もしばしば見受けられる。もちろん一部の小学校では英語の専科教員を配置するなどして、上記の目標や内容に添うかどうかは別として、言語習得につながるような体系的な英語活動を行っているのも事実である。しかしながら、外国語の使用や指導の経験がほとんどない大多数の教員にとっては、体系的な外国語指導計画は言うまでもなく、自身が中心となって行う日々の授業実践自体が負担と不安の連続であるのが現状ではないだろうか。それゆえ、ALTや地域人材に授業の大部分を任せてしまう事例や、専ら歌やゲームに頼ってしまい結果的に高学年児童を飽きさせてしまうような事例が多くなってはいないだろうか。

以上の前提を踏まえ、本研究では、外国語運用・指導能力の高い教員のいる小学校を想定するのではなく、多くの小学校でできること、小学校教員としての特性を生かしてこそできることを考え、その具体的なモデルとして一つのプロジェクト型英語活動とも呼べる事例の実践報告を行う。

2. プロジェクト型の発想

2. 1. 小学校教育及び小学校教員の特性

小学校や小学校教員の特性とは何であろうか。ここでは、大学附属や私立の小学校ではなく、圧倒的多数を占める公立の小学校に限定してその特性を考えてみたい。小学校教育の最も大きな特性の一つとして挙げられるのは、地域との連携であろう。もちろん中等教育においても地域との連携は教育上非常に重要な課題の一つであることに変わりはないが、その学区の範囲、子どもの発達段階に起因する保護者や地域との関係等を考慮すると、やはり小学校と地域との相互依存度は相対的に高くなることが多い。地域の協力を得られることは小学校における全体的な教育効果に大きな影響を与えると見て良いであろうし、逆に小学校側が教育活動の一環として地域に貢献することもあり得るだろう。当然ながらその際には、地域教育委員会の役割も重要な鍵となる。

また、小学校教員の特性として挙げられるのは、地域との関係の深さに加えて、学級担任が基本的に全教科を担当するという点である。家庭科、書写、図画

工作などのいわゆる実技科目を中心に専科教員に任せられる場合も確かに多いものの、大半の授業が学級担任によって行われるという点は、中等教育にはない特性だと言える。これにはいくつかの長所が考えられる。まず、学級単位で見た場合、各教科領域等の時間配当の順序や教材内容の配列をその気になれば比較的自由に変更できるという点である。また、これに関連して、教科領域等の枠組みを超えたカリキュラム設計が可能になる点も指摘できる。例えば、人権教育、環境教育、平和教育などの国際理解教育の範疇に入る内容、地域全体の教育課題、学校全体の教育目標など元々教科領域等の枠組みを超えて取り組むべきことが実践しやすくなる。さらに言うと、カリキュラム設計の自由度は、学級の枠組みを超え、学年全体ないしは学校全体での取り組みも実現可能になるということを示唆するものでもある。

2. 2. プロジェクト型外国語活動

通常、外国語活動の年間指導計画、単元計画は配当された時間（年間35授業時間）の枠内で作成されることが多いと思われる。特に『英語ノート』を利用する際には、その教材配列に添って授業が組み立てられがちであろう。『英語ノート』及び『英語ノート指導資料』は、当然ながら外国語活動の目標や内容を反映しつつ、様々な観点から工夫がなされている教材・指導書ではあるが、多くの小学校教員が使いこなせるかどうか、高学年児童の発達段階に見合うものかどうかという視点で考えると、必ずしも共通教材として機能するとは言えない面もある。とは言え、例えばこれまでの英語活動の蓄積がある教員や学校ならともかく、外国語活動を始めたばかりの教員や学校にとっては他の選択肢がないことも事実である。そこで、考えられるのが、小学校や小学校教員の特性を考慮したカリキュラム・授業設計の発想である。

上で述べた通り、地域との連携及び教科領域等を超えた枠組み作りは小学校だからこそ実現しやすいものである。教員のすべきことは、まず地域性や学校の教育課題、あるいは教科領域等にまたがるテーマを設定し、各教科、領域、特別活動等のどの部分でどのようにそのテーマを扱うことができるかを考えることである。外国語活動もそのテーマに併せて組み立てることになる。このような発想で計画された外国語活動を我々はプロジェクト型と呼ぶ。その際、各教育活動の目標を押さえることが必須条件である。外国語活動もその目標や内容を踏まえた上で計画されなければならない。

プロジェクト型は、規模が大きくなると学年団や他学年の教員の協力を得ることが必要となる。学校全体で取り組むなら校長等管理職の理解を得ること、地域連携が伴うなら教育委員会への相談等は言うまでもな

い。規模の大小は、それを計画する教員の小学校教諭としての経験や力量に応じて調整することになるであろう。以下、紹介する我々の事例は、規模的にはかなり大きなものである。

3. 世界遺産教育の一環としての英語活動²

今回の事例は、著者（土江）の現勤務校である公立小学校の取り組みである。奈良県北西部に位置する本校では、地域教育委員会の協力を得ながら地域世界無形文化遺産としても登録されている「能」を題材とした独自の教育活動を行っている。本校学区となる奈良県磯城郡川西町結崎は「能楽観世流発祥の地」と言われており、小学校教育課程で能に関する取り組みに毎年予算措置がなされているのは地域活性化の意味も込められている。

能楽に関する学習の従来の枠組みは「総合的な学習の時間」と「音楽」との教科等横断的な位置づけであったが、2011年度から本格的に開始される外国語活動の試験的な取り組みとして、2010年度末に英語活動を能楽に関する学習に関連付ける授業実践を開始した。学習指導要領に示された体験的な文化理解とともに、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」に資するよう、また「他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により指導の効果を高める」ことにつながるように、次のような指導計画・授業実践を行った。

- (1) 総合的な学習の時間と移行措置としての外国語活動配当時間の合科の枠を使い、1 単元（全 4 時間）「外国の人に能を紹介しよう」を実施（2010年 1 月～2 月初め）
- (2) 平城遷都1300年記念事業の川西町での催しの際に、児童は能楽の実演に参加し、会場に上記の英語活動の写真を掲示すると同時に作成したビデオを常時再生（2010年 2 月 7 日）
- (3) 学校教育課程全体での能の取り組みを手掛かりとしながら、地域文化理解から世界遺産学習へと発展させ、総合的な学習の時間で調べ学習（能を含め日本国内外の世界遺産について）、調べた内容をさらに外国語活動の時間で英語に翻訳（ALTの支援）した後、学年全体の外国語活動を設定し、世界遺産に関する英語での発表会（2011年 5 月～10 月）

以下、それぞれの指導目標、内容及びそれぞれの活動の成果等について説明する。

3. 1. 「外国の人に能を紹介しよう」

本単元での目標を次の通り設定した。

- ①外国語活動に意欲的に取り組み、国際交流活動に参加しようとする。（関心・意欲・態度）
- ②Noh play（能）の動きに対応する英語の表現を聞き取り理解する。また、指示に従ってその動作をすることができる。

き取り理解する。また、指示に従ってその動作をすることができる。

全 4 時間を外国語活動と総合的な学習の時間との合科として実施した。

- 1 時間目：外国の人に、Noh play（能）の紹介したい内容について考える。
- 2 時間目：外国の人に、Noh play（能）を紹介する内容をまとめ、英語での表現を練習する。
- 3 時間目：Noh play（能）の仕舞いの動きに対応する英語の表現を聞き取り、理解する。また、指示に従ってその動作をすることができる。（写真 1 は英語による指示で能の動きを練習している様子である。）
- 4 時間目：Noh play（能）を外国の人に紹介するビデオを作成することにより、国際交流に参加しようとする。

本単元の成果を見るために、質問紙票調査「振り返りシート（2010年 1 月29日実施）」を行った。対象は担当学級 5 年 2 組の26名である。質問内容及びその結果は次のようになった。



写真 1 英語の指示で能の動きの練習

「英語を使った活動に積極的に取り組むことができましたか」の質問に対して、「よくできた」と

の回答が58%、「まあまあできた」が42%、「あまりできなかった」「全くできなかった」とした児童はいなかった。

「英語の表現を聞き取り、理解し、指示に従ってその動作をすることができましたか」の質問に対して、「よくできた」が65%、「まあまあできた」が35%、「あまりできなかった」「全くできなかった」とした回答はなかった。

「学んだことを次の活動や生活に生かしていきたいと思いませんか」の質問に対して「思う」が77%、「少し思う」が15%、「あまり思わない」が8%、「思わない」とした児童はいなかった。

また、「今日の活動を振り返って思ったこと」を自由に記述させたところ、「英語の学習が楽しくなりました。そして、能をもっと知りたくなりました。今までは、能についてあまり知らなかったし、結崎が能ができた土地ということも知りませんでした。でもこの勉強をして、もっと能を知りたくなって、もっとがんばって能をしたくなりました。」のように、外国語活動と能学習の両方に意欲的になったという児童が多く見られた。

3. 2. 平城遷都1300年記念事業の川西町での催し「結崎DE能」

平城遷都1300年記念事業の川西町での催しの際に、児童は公民館における能楽の実演に参加した。会場には上記の英語活動の写真を掲示すると同時に、作成したビデオ「能を外国の人に紹介しよう」を常時再生した。児童にとっては、これまでの学習の成果を様々な形で発表する場となった。(写真2は児童による能楽の実演である。)

3. 3. 「自分たちに関わる世界遺産を紹介しよう」



写真2 児童による能楽の実演

学校全体で取り組んできた地域文化理解の対象が偶然にも世界無形文化遺産であったことから、さ

らにプロジェクトを発展させ、世界遺産を切り口に単元を構成することとした。田淵(2010)の言う「世界遺産を通しての教育」に基づき、「世界遺産を切り口にして、国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育などに迫る教育」の試みである。本単元では、総合的な学習の時間に自分たちに関わる身近な世界遺産について調べ、外国語活動として紹介したい内容を英語で表現するという活動を設定した。今後、英語を媒介とし、他国の人たちと交流することを想定しながら取り組むことで、世界遺産についての単なる知識だけでなく、田淵が指摘しているように、自国と他国の文化を比較しながら理解を深め、共に尊重しようとする態度を育成していくことをめざそうと考えたのである。

本単元での具体的な目標は次の通りである。

- ①外国語活動に意欲的に取り組む(関心・意欲・態度)
- ②世界遺産について知り、文化などに興味や関心を持つ(国際理解)
- ③紹介したい世界遺産について英語で表現したり、理解したりする(態度)

単元は、全6時間のうち、総合的な学習の時間として2時間、外国語活動として4時間を設定した。

1時間目:本単元のねらいや意義について考える。(総合的な学習の時間)(『英語ノート2』p.42を参照し、世界遺産について知る。)

2時間目:自分たちに関わる世界遺産について調べ、紹介したい内容を日本語で考える。(総合的な学習の時間)

3時間目:紹介する内容を英語で表現する。(英語表現に関しては担任教諭とゲストティーチャーで作成、編集)

4時間目:英語による紹介文の発表練習をする。(地域の中学校のALTによる発音練習)

5時間目:学年全体で集まり、代表として3グループを選出し、それぞれ紹介したい世界遺産についてパワーポイントで写真を示しながら英語で発表する。児童は発表を聞きながら、内容理解を試みる。ゲストティーチャーとして日本在住のインド人を招き、各グループの発表についてコメントをしてもらう。3グループの紹介した世界遺産は、「能」、「奈良の世界遺産」、「負の世界遺産」であった。

6時間目:本単元のまとめ(「振り返りカード」による質問紙票調査)

上で示した5時間目に児童3グループが紹介したそれぞれの遺産についての児童との関わり、及び本単元で取り上げた意義について若干説明を加える。

まず「能」についてである。これは、川西町の地域文化についての発表である。校区の川西町は観世流の能の発祥の地とされており、児童は4年生から総合的な学習の時間に取り組んできたが、事前の意識調査では、能が世界無形文化遺産であるということを知っていた者はほとんどいなかった。発表は本プロジェクトでの取り組み3.1で作成した紹介文をそのまま使用した。本単元で能について取り上げることにより、能が世界無形文化遺産であることを再認識し、地域の遺産の価値に気付くこと、さらに、自分の地域に誇りを持ち、地域の文化を大切にしていこうという態度を育成することをねらいとしていた。

次に奈良の世界遺産に関しては、奈良市の東大寺、興福寺等の8つの遺産、及び法隆寺について発表した。事前の意識調査としては、多くの児童は東大寺や法隆寺は世界遺産だということは知っていたが、平城宮跡や唐招提寺など、他の奈良の遺産を知っている児童は少なかった。児童は社会科で法隆寺、東大寺、唐招提寺について学習し、春の遠足で平城遷都1300年を記念して復元された平城京跡を見学した。そして、見学したことを基にして、総合的な学習の時間に平城京や奈良時代の人々のくらしなどについてグループごとにテーマを決めて調べ学習をし、ポスター発表会を行った。さらに、運動会の組み立て体操では、タイトルを「今、よみがえる古の都」とし、古代から平城遷都1300年までの歴史に関わる建造物(大極殿、阿修羅像)などを身体表現した。本単元で、奈良の世界遺産について取り上げることにより、社会科や総合的な学習の時間、運動会で学習したことを振り返らせるとともに、日本の文化が孤立して存在するのではなく、韓国・中国・インドなどの他の文化の影響を受けてきたという「文化の融合性」に気付かせることをねらいとした。また、英語で紹介することにより、他の国の人達に自分の国の文化を伝えることができるという意識

を持たせることができると考えた。

最後に「負の世界遺産」である。このグループは、修学旅行で訪れた「負の世界遺産」である原爆ドーム、及び原爆記念資料館、平和公園で学んだことを発表した。児童は修学旅行の事前学習として、総合的な学習の時間に原爆のことや平和公園内の慰霊碑等について調べ、実際に行き見学することにより、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどを学ぶことができた。そして、平和な世界を築いていくために自分たちができることを考え、「修学旅行報告会」において全校児童及び保護者の前でその学びを発表した。本単元では、原爆ドームが世界遺産として登録されている意義について考えさせるとともに、英語で紹介することにより、唯一の被爆国の子どもである自分たちが、平和の大切さを外国の人にアピールすることができるという意識を持たせる意図があった。

本単元の成果を測るために、6年生77名を対象に質問紙票調査（外国語活動「振り返りシート（2010年12月6日実施）」）を実施した。結果は次の通りである。

「英語を使った活動に積極的に取り組むことができましたか」の質問に対して、「よくできた」と回答した児童が57%、「まあまあできた」が34%「あまりできなかった」が3%、「全くできなかった」は6%であった。

また、児童に感想を自由に記述させ、内容に応じて「関心・意欲に関わること」「文化への気付き」「表現に関わること」に分けてまとめた。

「関心・意欲に関わること」では、「いろいろな遺産についても分かったし、英語も前よりもっとすきになった気がします」のような感想が多くみられ、世界遺産や英語を学んだりすることに対して意欲的に取り組む姿勢が見られた。

「文化への気付き」では、「奈良県の世界遺産や能、平和の大切さをもっと多くの人に伝えてみたい」などの感想が多く見られた。また、ゲストティーチャーから、いろいろな物や文化がシルクロードなどを通して日本に伝わってきたことを聞き、「阿修羅はインドから伝わったなんて初めて知った」「仏教が中国、インドから伝わってきたことがよくわかった」のような感想も見られ、日本の文化が孤立して存在するのではなく、韓国・中国・インドなどの他の文化の影響を受けてきたという「文化の融合性」に気付く児童がいた。

「表現に関わること」では、英語コミュニケーション（聞く・話す）に関して、「英語で言っていることは難しかったけれど、相手の言っていることが伝わった」のような感想が多くみられた。

4. おわりに

外国語活動の枠の中だけで単元計画を立て授業実践

を行うこと、すなわち児童のごく身近なもの、例えば好きな果物、動物、スポーツなどを題材に伝えられる喜びを感じさせるのも外国語活動の一つの選択肢ではあるだろう。しかし児童の発達段階から見てこれらの話題は情報量として限定的であり、外国語を使うこと自体が目的になりかねない。つまり何のために外国語を使うのが児童には見えなくなってしまう傾向がありはしないだろうか。

プロジェクト型外国語活動の一つのモデルとして上で紹介した世界遺産教育の一環としての英語活動は、児童の身近にありながらも内容や意義は広く深いものである。そもそも世界遺産教育は、国際理解教育の枠組みと密接に関わっており、元々教科領域等のいずれかに収まりきる性質のものではない。こうした大きなテーマを小学校の教育活動の様々な局面で展開し、外国語活動もその中に位置づけていくことにより、児童の学びとりわけ達成感や充実感という意味において効果が大きくなるように思われる。もちろん、その内容の濃さ故に、例えば発表の準備段階の作業は場合によっては児童にとって楽しいどころか辛いものになることもあった。しかし彼らは、少なくとも何のために苦しんで英語を練習しているかを常に意識できていたようである。楽しいだけで言語を身につけること、何かを深く学ぶことができないことは我々誰もが経験しているはずである。時には苦しい作業に耐えながらも意味あることを伝え合う体験こそが、それこそコミュニケーション能力の素地につながるのではないだろうか。今回の実践報告は、担当する教員にとってある意味挑戦的な試みであったが、小学校だからこそ、あるいは小学校教員だからこそできることを考え、児童の学びを少なからず感じられたことは大きな収穫であったと言える。

注

1. 本来であれば、国際理解教育の立場からは、外国語活動がそもそも英語で良いのかという議論がなされてしかるべきだが、本稿では、現実としてほとんどの小学校で行われている英語活動をどう展開すべきかを考えることとし、英語自体の適不適の問題は取り上げない。
2. 本プロジェクトは、著者土江が奈良教育大学教職大学院における課題研究の一環として実践したものであり、共著者吉村はその助言や補助を行った。

謝辞

本研究は、著者土江が奈良教育大学教職大学院に現職院生として在籍中に、教職大学院教員の指導並びに勤務校の山田賀一校長をはじめ同僚職員並びに

地域教育委員会関係者の協力を得ながら行い、共著者吉村とともにまとめたものである。ここに感謝の意を表す。

引用文献

- 坂本ひとみ (2008). 「小学校英語活動における国際理解教育のカリキュラム」 東洋学園大学紀要, 13, 217-231.
- 田淵五十生 (2010). 「世界遺産教育と国際理解教育」 日本国際理解教育学会編著『グローバル化時代の国際理解教育：実践と理論をつなぐ』明石書店, 196-202.
- 二五義博 (2011). 「社会や算数の教科内容を組み入れた小学校英語教育」 河原俊昭・中村秩祥子編著『小学校の英語教育：小学校の多言語文化の確立のために』明石書店, 216-240.
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説』文部科学省
- 文部科学省 (2009). 『英語ノート1・2』教育出版
- 文部科学省 (2009). 『英語ノート指導資料1・2』文部科学省
- 吉川成司 (2002). 「総合的な学習の時間, 国際理解教育, 英語教育-共生としての学び-」 創価大学教育学部論集, 53, 39-51